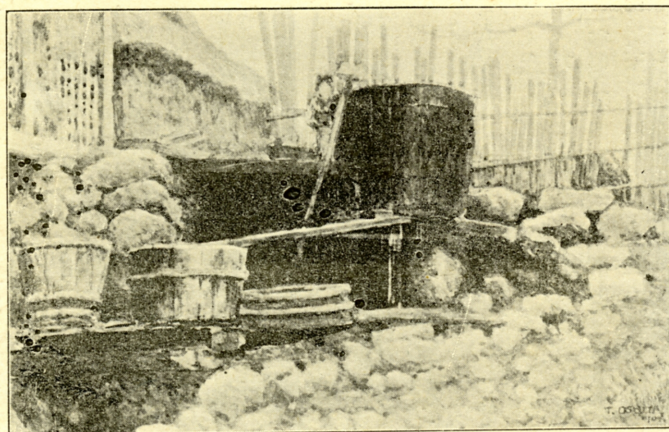


見ると如何にもひどくて、能くこんなものを人に見せられたと思ふ位であるが、それでも先生はそうがみく／＼叱ると云ふ方ではなく、其内自然に分つて来ると云ふ風で、ぼつ／＼教導されたのである。其年の春明治美術會の創立十年紀念展覽會へ私は初めて二三枚の水繪を出品した。無論成つて居ないのであつたが、相應に自惚もあつて、他の人のと比べて馬鹿に劣つて居るとは思はなかつたのである。

(未完)



便は彼地より差上可申候草々(十月二十五日本郷にて)

## 秋のたより

汀 登



前略、此度の寫生旅行、かれての御約束に候ひしにどうやら御都合よろしからぬ趣、眞に遺憾此上なく候。ついで旅中のありさま漏れなく知らせよとの仰拜承致候。例の暢氣連中のとゆへ嘸かしく／＼の面白き出来事も起り可申候まゝ、御耻かしき不文ながら、そのおり／＼書き綴りて御笑ひに供へ可申候。前にも一寸申上候通り、參るべ先きは武西多摩川の奥小丹波あたりを中心として、附近の景勝をあまりく寫しとらん計畫、出發は本月の末、同行者は牛込のK氏及び不同舎のT氏に御座候。當春以來田舎の風景に接せず、旅籠屋の糠臭き飯もやゝ戀しく覺え候折柄とて、旅中の光景など目に見るが如く思はれ、はやくその日の來れかしと楽しみまち暮し居候。いづれ後

御約束申上候通これより旅の日記御報申上候。さて私共はいよいよ十月三十一日の一番汽車にて出發の日に極め候故其前日は用意萬端に忙しく暮し、道順よければとのK氏の御勧めに従ひ、同夜は市ヶ谷なる氏の御宅に一泊、翌早朝支度もそこく、草鞋はき占め外に出て、時計を見るに、新宿一番列車の時刻に幾許もあまらず、急がすは乗遅れもやせんと、今食事せしのみ小腹の痛むも構はて夢中に奔り、息せき到り着けば停車場にて未だ切符も賣出さず見れば發車には猶十分餘も間有之、あまりに慌てしを吾ながら心耻しく存候。やがて待つ間もなく汽車も來り、私共もプラトホームに立ち出て候て、T氏や在ると車中を見れば、遙か後方の窓より長々と首をさし出して笑みつゝ招ぐはその人なり。これより三人車を共にし、語りつ笑ひつ程なく立川驛に着いたし、爰にて青梅行の輕便鐵道に乗換申候。この鐵道はその名の如く、玩弄物たもつもののやうな小なものにて、頗る不思議に思はれ候ものから、例の惡口揃ひとて何の角のところも批難致候處、はしなくも鐵道君の小癩に障りしにや、汽笛一聲進行を始むるや否、上下動俄かに烈しく、その響は百雷ものかは、膝を交へ顔を接しても互の言葉は通ぜず、とんだ復響に止むを得ず沈黙を守り候もおかしきと存候。拜島、福生、羽村、小作など小さな停車場に一人二人客の上下するを見、やがて青梅に着致候時は未だ九時前にて、多摩沿岸の連山眼前に横はれるに、そのなつかしき秋の色を見て私共は思はず蹊躑

致候。これよりは各々荷物肩にして甲州別街道とよばるゝ砂利道をたどり候が、脚こそ忙しけれ口は皆暇なりば、不相變のむだを叩き申候、私のいてたち、黒の背廣にズボン半を疊み上げ、黒の外套草鞋、脚胖、縁廣のアメリカ帽、畫囊斜めに肩を聳えて先登に歩み候を見て、K氏まづ評して陸軍士官の馬丁と申候。こは外套套のそれに似通ひたればとの事にて、T氏も賛成と呼ぶ。怪しかるを申ものぞと振返りてT氏を見るに、縞の綿入古ぼけし袴の腿立ち高くとりて脚胖に麻裏、羽織なればいてたち甲斐々々しきに、小さからぬ柳行李を棒の先につけて肩にせる工合、どう見ても長井兵助あちらでも御用と仰やるの手傳とよりは見え、私はこれを道中の物貰ひと評し候。次にK氏はと見れば、怪しげなる色の洋服、祖父の代よりと思はるゝ帽子(その頃は珍物なるべく候)色褪せし脚胖の様子、草鞋の穿き工合、風呂敷包持つその手つき、何となく慧かしげに油斷のならぬ風體に、これをば田舎廻りの欺偽師と評し申候。かく詰らぬととも言ひ争ひ與じ盛んに妙論卓説を吐き出し、その間には随分前人未言の名説も有之候ひしが、あまりに深遠なるものゝみにて只今記憶を逸し候は残念に存候。桃の名所二股尾をも過ぎ、それより澤井に出て、漸く多摩川畔の好風景に接し申し候。私は御嶽山道万年橋迄は前年參り候事有之候へども、紅き梢清き水さながら新しき景を迎え候に異ならず、これより後はかたみに風光の美を賞するのみ、かくて口も草臥れ脚も疲れ肩も痛みを覺え候ころ漸く目指す小丹波に着し、永屋と申に

宿を定め申候。

宿屋の椽にて晝食をすませ、私はK氏とうちつれて前の岸を下り、河原に出て、秋酬なる溪間たにまの景に筆執り申候。黄に、紅に、緑に、たゞわけもなく彩られて、纏りたる調子を捉えがたく、根岸や三河島の、空許りの漠とした景色とさまかはりて、色も形も複雑を極め候ものから、さらぬも鈍き手腕はますく憶して書面徒らに汚れゆくのみ、時しも小雨ふりいて川風さむく、到底一度に仕上るべき見込も無之候まゝ、あとは明日の事と又崖を上りて宿へ歸り申候。

この邊の旅籠屋と申ものは普通の農家にして、只客のための座敷二三供へあるのみに候。修學旅行なればとて、旅籠料直切りしにも拘はらず、

一番よき部屋に通し、僅か許りの茶代を興へしに、俄に菓子求め來りて出すなど、所柄とて憎からぬもてなし振に御座候。浴ゆあつも終り、かれて思ひしよりは上等の夕飯にもありつき、さて時計を見れば未だ六時前、何の用事もなければ臥床に入るにはあまりに早し甚將某の如き遊び道具も見あたらず、今日は終日のお饒舌しやべりに談話は最早飽きたり、せめては歌留多といふものなどあれかしと、宿の人に問ふにまだ見たこともなしといふ、思ひ



長澤龍生氏筆

たちしとなさぬも口惜しく、さらばとて俄に紙をたち筆を走らせ、吉野の山の白ゆきにも紛ふべき風流なるもの造り出して、夫よりは數番の合戦、T氏連りに敗れていよいよ菓子散財の運命を擔ひ、札を擲ち嘆じて曰く、『悪友に誘はれて悪戯に敗れし』と、その言ひやうの如何にも毒々しとて、爰にまた言葉の花をさかせつ、さて各々臥床にもぐり込みてしとくと降る秋雨に誘はれていつか野の聲と相成申候。以上朝飯まつ間の走りかき、

幸に御判讀をいのり候。(十一月一日小丹波より)

三

前便に引續き申上候、さて翌一日は身に染みわたる朝寒に夢を破られ、見れば兩戸の隙より青白き明りの障子にうつりて、涼々となる音、はら／＼と板戸うつ音など耳に入り

ものから、雨なほ止まじと口惜しさ限りなく、起き出る張合もなく、再び深く衾を冠り晝迄も臥床はなれじなど云ひ合ひしが、K氏の小用にとて起ちて兩戸繰開き見れば、豈圖らん一點の雲もなき絶好の天氣にて、さきのは／＼の音は、朝嵐に誘はれて木の葉の散るのにて候ひし。この有様に宛も狂氣の如く喜び勇みて、忽ち飛起き、朝の食事こそ／＼に、大なる握り飯銘々腰に結つけ、T氏は好位地探險に、K氏と私とは上の方瀧あ

る方へ参り、澤へ下り橋を前にして寫生を始め申候。こゝも景色殊に勝れ居候ためか筆は心に任せず、この苦心は迄に覺えなきとに御座候。夫よりは昨日の續きを描くべく崖下へ下り、またも戦をはじめ申候。私共寫生致し居候場處は水澄みたる淵の前にて、深藍色の透きて清きに、流れてはゆく波紋の艶なる、をり／＼岩魚の群の見えてはかくるゝ美はしき、身も心も引入れらるゝ心地致され、屢々彩筆を止め申候。

旅にて樂しきは、一日の業を終りてゆる／＼と風呂にも入り、膝くつろげて茶菓に對する時に候。今日筆つけし繪を並べて、彼處はかく直さん、あの處は思ふやうに出來しなど、友とも語り自らも思ひて茶を啜るの快は、此境に在らぬものゝ窺ひ知り難きとと存候。兎角する程にT氏も歸り來り、是よりは鼎座又もや歌留多に耽り申候。

こゝにおかしかりしは、K氏此夜思はぬ滑稽を演せられしことに御座候。皆々臥床に入りて後、昨夜の寒かりとを思ひ出でてけ布團を求めしに、これにてもと三枚を置きて参り候、K氏先づ跳ね起き、これこそ我のよと、中にて一番美しきをとり去り、残りを私共に頒たれしが、さて後に見ればK氏の最初にとりし分は、何やら氣味わるき斑點數ありて、黒光りに光れるものには候ため少なからぬ嘲笑を買はれしは、聊か氣の毒にも存せられ候。

二日 この日も極めて好天氣、今日はT氏は油繪の大作にかゝるべく、K氏と私は下流を梅澤、丹三郎邊の寫生を試み申候。道の板橋霜白く、花あざみ野菊の類のうら枯れて頼りなくなつて秋は淋しきものと存候。河井より橋をわたり、對岸柳澤より

又川を越して、昨日の瀧を寫し終り、更に崖下の圖も仕上げ、夕煙たち昇る頃宿へ歸り申候。

三日 引つゞき天氣よろしく一同勇み居候。今日もK氏と共に上流柳澤へ参り、船橋と申崖下へ陣取り、山せまりて水深き幽境を寫し、爰に一日を暮し申候

旅に在ての一番の慾は食物にて、朝夕の膳部、かゝる山里の事とて喜んで口に致すべき程のものは無之候へども、夫にも不拘いと樂しみにて、量もたしかに平生の倍は何の苦もなく、その上餅やら菓子やら饅頭やら、何にても手當り次第に口に入れ、猶洋食の、汁粉の、すしのと旨いものを欲しがり、よるとさばると食物の話のみに御座候。他に慾を満たすの快樂も無之候ものから、かくはさもなく意地きたなく相成候ならん乎。

K氏明日歸京の筈ゆへ、此夜駄菓子少々求め來りて送別會を開き候處、如何なる譯にや同氏の腰の邊より祝砲を放つと非常にて、T氏も時々應砲致され、私一人双方の攻撃に大閉口、否閉鼻仕候、續いてはK氏放發のレクチュア、T氏の駁論、實地試驗なども有之、最後の一發あまりに大に、紙障ために振い、幾間か隔たりし此家の人々に迄に大笑を致させ候。

四日 風立ちしも天氣よろしく候。K氏とは宿の前に袂を分ち申候。腰のほとりに大砲もてる愛嬌もの、一人歸すは誠に残念、氏も永く留りたかりしが、勤めある身の是非もなやに候。新聞をよこせ、旨いものを送れと、肩にもある注文澤山、暫しは後ろ影を見送申候。

私は一人昨日の船橋へ参り寫生をつゞけ申候。晝の辨當濟まして、不圖繪を立て置きし岩の方を見るに、四尺にも餘るべき青大将のいつの間にか三脚を擲み居候には一驚致候。午後は對岸坂下に桑の黄葉せるを寫し、昨日迄二人なりしを、今は孤影を踏んでうら淋しく歸宿致候、私は猶一週間程は滞在の筈、爾後の日記は其内又々可申上候草々(十一月四日夜小丹波より)